



【解説】

この漢詩は、通称「川中島」と呼ばれる詩吟である。上杉謙信と武田信玄の両雄は五回、川中島で合戦をしたと云う。第一回は「更科八幡の戦い」、第二回は「犀川の戦い」、第三回は「上野原の戦い」、第四回は「八幡原の戦い」そして第五回が「塩崎の対陣」である。総称して川中島の合戦と呼ばれるのだが、第四回が決戦であった。川中島とは、犀川と千曲川に囲まれた三角地の地名である。戦記としての評は別に譲り、ここでは詩の解説を施そう。

妻女山に布陣した上杉軍と海津城に布陣した武田軍の戦線は膠着していたのだが、軍師、山本勘助を擁する武田軍は、挟み撃ち作戦に転じ、軍勢を本陣と別動隊に二分し、別動隊一万二千は、妻女山の上杉軍を「啄木鳥戦法」で追い落としに就く。それを察知した上杉全軍一万三千は、急遽、妻女山を下り、夜陰に乗じて「雨宮の渡」から千曲川を渡り、川中島の「八幡原」に進軍した。

武田軍本陣の八千は、海津城を出て千曲川の下流を渡って「篠ノ井の会」に先ず布陣し、そして、追い落とされてくる上杉軍を待ち伏せ、別動隊と挟み撃ちにして殲滅する為、更に八幡原に進軍した。

上杉軍進軍の鞭声とは、馬に鞭を加える「ピシ、バシ」と言う音を指す。肅々とは、静かに音を立てずに、という意である。

こうして裏をかいた上杉軍は、夜が白む頃には、何と、渡河した

武田軍本陣の前面に布陣していた。その日は濃霧であり、夜明けと共に霧が晴れると、突然現れた上杉軍に武田軍は啞然としたことであろう。

大牙とは本陣に立てる大将旗として、竿の上に大きな象牙を用いることを言うらしいが、恐らく大きな猪の牙であろう。

上杉軍は、第一回の戦いより十年、宿敵武田を討つべく自軍を錬成し決戦に備えてきた。今、戦端は開かれ、上杉軍は「車懸り」で武田軍に襲いかかったのである。

自軍一万三千に対し、武田軍は八千であるから、前半は有利に展開し、多くの武田軍重臣が討ち死にした。しかし、もぬけの殻を知った武田の別動隊が八幡原に追って来ると、戦場は混戦となった。謙信はこれを察知し、隙を突いて、何と、謙信自らが信玄に一騎打を挑んでいる。敵中を馬上で駆け抜け、流星が一瞬の光を放つ如く、抜刀した刃を陣の床几に座す信玄に振り下ろした。

長蛇とは貪欲な信玄のこともあり、武田軍の「長蛇の陣」でもある。信玄は鉄製の軍配で一大刀を受け止め、或は二大刀で肩に傷を受けながらも刃を受け止めている内に、家臣が応戦に入った。筆者の言う「長蛇の陣」とは、「その首を撃てば、尾が救い、中を撃てば、首尾の両方が救い、尾を撃てば首が救う」という孫子の

陣法のように、家臣が応変の守りをしたと山陽は掛けているのだ。結局、信玄の家臣が謙信の馬の尻を刺して退け、謙信は信玄を討ち取れなかったのである。その事を頼山陽は謙信が、さぞ残念であったろうと言っているのである。

後世、甲斐武田家は滅び、上杉家は米沢藩で続いた。上杉謙信は兵略に長ずるも領土的野心を持たず、義侠に厚かった。

戦時にあっても塩路を断つこともせず、「敵に塩を送る」という故事が生まれていることから、後の世の武士道を彷彿させる。

この漢詩は剣舞でもある。筆者が小学生の頃、「部隊長〜」と言って訪ねてきてくれた戦友達の前で、父は剣舞を舞ったことを覚えている。座敷では些少の酒が出されていた様に思うが、突然、その座敷から、酒を飲めない父の、普段と違う大声が聞こえてきて、戦慄を覚えたことを思い出す。あの時の剣は木刀であったのだろうか、それとも真剣であったのだろうか、それは定かでない。筆者には、父の剣舞は一度きり、しかも声だけであった。

令和四年二月十八日

大中臣正比呂 記す

